

東西文明の比較 (9)

陽光新聞社・顧問
塩澤宏宣

大変興味ある記事から始めたいと思います。10月5日の読売新聞が1面に載せました。

「奈良市の平城宮跡から出土した8世紀中頃の木簡に、ペルシャを意味する“破斯”^{はし}という名字を持つ役人の名前が書かれていたことがわかった」。赤外線撮影をした結果、「役人を養成する大学寮で働いていたペルシャ人、破斯清道の勤務記録であることがわかった」。という記事です。天平神護元年(765年)という年号も書かれているそうです。ちなみに、「続日本紀」には736年、遣唐使が唐の人

三人、破斯一人を日本に連れ帰り、聖武天皇が会ったと記されているそうです。遠い昔にペルシャ(現イラン)との直接交流があったことにロマンを感じました。

さて、10月号では私たち日本人の祖先である縄文人の築いた伝統が、今も受け継がれているということについて書くと述べました。そこで本題に戻ります。

🏠「定住」と、その定義

人類の歴史を考えると、最初の“革命”は、石器の発明です。その次は、“火の使用”でしょう。三番目に「定住」といわれます。この人類史上画期的な変化が縄文文化を生み出し、現代の私たちの生活の基礎を形作ったのです。ここでその「定住」を定義づけてみます。

縄文人は「平坦で陽当たりが良く、周辺で水が確保でき、種類や量が安定した食料が他の集団と競合せずに入手できる場所を、自分たちの集団規模に合わせて定住の場として選定した」。これが、定住の最低条件です。そうした場所を選び、居住用の

竪穴住居を整備し、ゴミ捨て場や墓を築きました。石器や原石の貯蔵場を持つ遺跡も存在しました。縄文時代の早期(1万～6000年前)には、日本列島全体にこうした遺跡が広がりました。東北地方から以南では、クリを栽培し、その貯蔵庫跡も発見されています。

🍲鍋料理を生んだ「土器」と「弓矢」の出現

縄文土器は12,000年前には一般化しました。土器の出現は、現在のところ、世界最古といわれています。そして縄文人は「煮炊き」することを思いつきました。気候の温暖化が進み、食料が豊富に入手できるようになりました。ワラビやゼンマイといった山菜から、ハマグリ・マガキや海藻類、ニホンジカ・イノシシを初めとした鳥獣の肉を「煮炊き」しました。この「煮炊き」は、現代日本の「鍋料理」として引き継がれています。

また、狩猟具の発明もありました。旧石器時代人が使用していた石槍から「弓矢」へと変革しました。旧石器時代の狩猟の対象はナウマンゾウやオオツノジカ、ヘラジカや野牛、ヒグマなどの大型獣でしたが、気候変動により本州ではこれらの大型獣の姿が消えてしまい、代わりに出現したのが動きの速いイノシシやニホンジカなどの中小型獣です。石器の技術が発達して、小型の石^{やじり}鏃を作るのが可能になりました。「弓矢」の源流は分っていませんが、日本各地で発見される「矢柄研磨器(矢の柄を整形する道具)」が、シベリアやヨーロッパ各地でも見つかっているところから、シベリア経由で日本に持ち込まれたのではないかと考えられます。

最近の日本では、熊や猪、猿などの農作物被害が多発しています。農家の人々以外にも、山菜採りの人々も熊に襲われるなどのニュースが流れます。野獣ハンター(弓矢の代わりに鉄砲)が高齢になって活躍できなくなったことが理由に挙げられています。

どうすれば「動物と人間の共生」ができるか、縄文人に聞いてみたいと思います。

石器石材の流通と手工業生産

石器の石材、たとえば「黒曜石」が有名です。堅くて割れやすく、鋭い刃になります。縄文時代の交易品の代表でしょう。産地が特定できることから、流通経路が分ります。約3万年前の旧石器時代から、半径200～300キロ圏の範囲で流通していたようです。黒曜石の主産地は、全国に70箇所ありましたが、特に有名な長野県の霧ヶ峰高原では、原石や半加工品が貯蔵された状態で発見されています。これは、打製石器の加工地であることを意味しています。すなわち、原料生産から加工製品までを一貫して行っていたことを示しています。ただし、これらの製品の見返り品はなかったようです。利潤を追求する経済行為ではなかったのです。

政府は「地域創生」を叫んでいます。縄文人が見たら「笑ってしまう」でしょうね。

「干し貝の加工」工場

東京都北区の中里貝塚にあった「干し貝」の加工工場では製品を内陸部へ供給していました。春先にはマガキ、初夏にはハマグリを採取して剥き身や干し貝を大量生産していました。砂地に浅い窪みを掘り、大きな皿を作ってその周囲を薪であぶる。沸騰した海水に貝を入れると貝は口を開き、簡単に剥き身をとることができます。その剥き身を干せば、長持ちする「干し貝」が出来ます。後には、この方法が広まり、千葉県の実積寺や神門貝塚、いわき海岸や豊橋などでも中塚と同じ「工場跡」が発見されています。

原料を多量に獲得して保存・加工・貯蔵して、遠隔地の他集団に供給するシステムがこの時代に完成していたのです。

遠隔地への運搬は「丸木舟」

さすが、海に囲まれた日本列島です。地域特産品は丸木舟で運ばれました。後期旧石器時代には伊豆の神津島や島根県の隠岐島で算出した黒曜石が本土に運ばれていたようです。しかし、実物の丸木舟が確認されたのは縄文時代早期のものです。日

本中の港や湖（琵琶湖）から出土しており、その数は60か所の遺跡から100艘以上の丸木舟が見つかっています。

長さ6～7メートル、幅60センチの大型の外洋の大型船から、長さ3～4メートル、幅50センチの小型まであります。江戸時代の「北前船」の先駆でしょうか。

海外(東アジア)との交流

旧石器時代から東北アジアとの交流がありました。細石刃などの石器に類似性があることが判断材料のようです。しかし、定住生活が安定した後の縄文文化は、日本列島固有の文化として発達したことは間違いありません。

縄文時代は集落間の強いネットワークを持ち、多種類の物品が頻繁に流通していました。

こうした流通は、列島内に限らず、北は中国東北部・ロシア沿海州・サハリン、西は朝鮮半島・中国大陸、さらには日本海から直接ルートで東北アジアへも繋がっていました。

現在のように、国とか民族とかの概念を持たなかった時代では、海という難関はあったにせよ、東西南北のいずれにも歩を進めて交流を図ることは容易であったでしょう。

この交流について、興味ある説があります。交流には、東アジアの自然(植生)が関係していたというのです。大陸をも俯瞰した考えです。

中国は、長江と淮河の中間域を堺として南北に2つの森林地帯を区分けします。南側は常緑のカシ類を中心にシイ類・タブやツバキなどの「常緑広葉樹林帯」。ヒマラヤの中腹からアッサム・雲南の高地、長江以南の江南山地を経て朝鮮半島南部や日本列島西部(中部地方を堺)に及ぶ地域です。これに対して北側の森林地帯を「落葉広葉樹林帯」と定義します。コナラの樹木が中心です。中国東北部からシベリア・樺太、日本列島東部、朝鮮半島北部までを指します。これらの2つの地域内で文化交流が行われていたという説です。

この説については次回に記そうと思います。

■お詫び “わんりい” 9月号の拙稿に下記2か所の誤りがありました。読者の吉川様のご指摘です。

* 日本列島で最古の遺跡は宮城県北西部の江合川流域に連なる「座散乱木・馬場壇・中峰遺跡で約1万4千年以前のもので、発見された石器にはナウマンゾウやオオツノシカの脂肪が付着していました。また使用痕（動物の角や骨、皮や肉の加工・調理）が認められています。

上記文について：

2000年11月5日、毎日新聞によって「ねつ造事件」がスクープされました。東北旧石器文化研究所副理事長（当時）の藤村新一氏が、自ら穴を掘って石器を埋めていたという事実が明らかになったこと。これによって彼が関係した作業がすべてねつ造であり、従って上記の遺跡および石器に付着していた脂肪についても事実ではないことが判明しました。従いましてこの部分を削除いたします。

* 拙稿の作成に参考にした書籍は「集英社版日本史誕生（佐々木高明氏著）」でした。初版が1991年5月31日です。ねつ造事件発覚以前の出版物でした。とは申せ、“素人の浅はかさ”大いに恥じる次第です。お許しいただきたく、お願いいたします。

* 北京原人と同じ原人が日本列島にも存在していたのです。下記は参考記事です。

1968年に、沖縄の具志頭村港川で5～9体分の古人骨が発見されました。18000年前の旧石器時代のもものと推定されます。日本最古の人骨です。中国華南の柳江人と類似点が多いと考えられています。おそらく、氷期の海面が低下した時期に、古モンゴロイドの一部が、中国大陸南部から沖縄や西日本へ移住してきたのではないかと推定されています。



イラスト 満柏